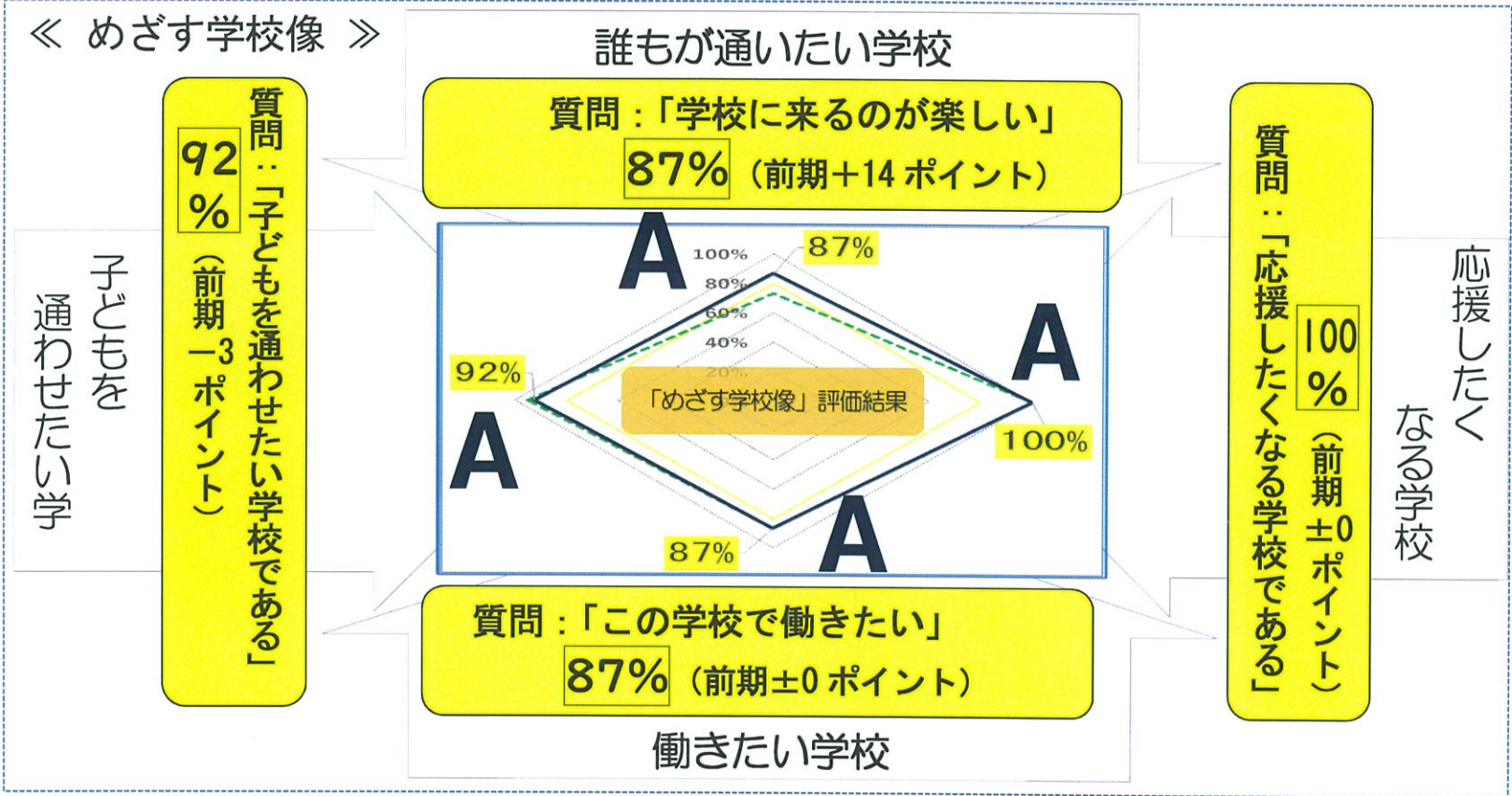


【小・中学校 学校教育目標】 “幸せ”を求めて 仲間とともに挑戦しようとする子どもの育成 ～ 次代を生き抜く力を育む ～

【子ども（児童・生徒）】



【職員】

【感想・分析と今後の課題・展望】「めざす学校像」肯定的意見の割合は四者ともに8割を超えており、オールAの結果となった。中でも、子どもの自己評価が前期を14ポイント上回る結果となった要因は、前期の発表機会や行事の縮小・中止等が大きく影響していたと考えることが妥当であろう。つまり、後期はコロナ対策をしながら、やり方を工夫して行事等を行った結果、ポイントが上がったと推測している。このことから、次年度の教育活動においても、発表機会や行事等を工夫して実施することが大切であると考えている。



【小・中学校 学校教育目標】 “幸せ” を求めて 仲間とともに挑戦しようとする子どもの育成 ～ 次代を生き抜く力を育む ～

学びをつなぐ子ども
「あれ?」「やってみよう!」

A 83% (前期+4p)

【子ども(児童・生徒)】

人と人との関わりを大切に子ども
「いっしょに!」「ありがとう!」

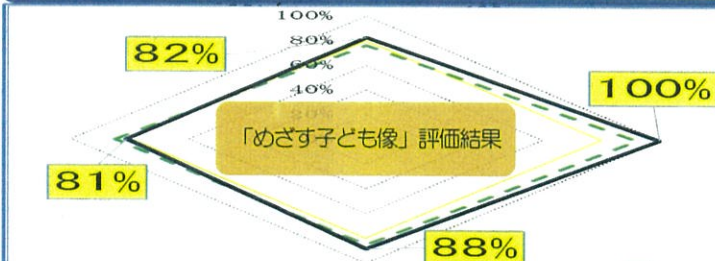
A 87% (前期+5p)

自他を大切に子ども
「ありのままに!」「なんとかなる!」

B 74% (前期+9p)

【めざす子ども像】

A 82% (前期+6ポイント)



88% (前期+3ポイント) A

【「めざす子ども像」への取組】

A

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

100%

【保護者】

「めざす子ども像」

人と人との関わりを大切に子ども

A 89% (前期±0p)

学びをつなぐ子ども

B 73% (前期-6p)

自他を大切に子ども

B 75% (前期-8p)

81%

A
81% (前期-4ポイント)

A

「めざす子ども像」

【地域・社会】

人と人との関わりを大切に子ども

A 100% (前期+9p)

学びをつなぐ子ども

A 100% (前期±0p)

自他を大切に子ども

A 100% (前期+11p)

A 89% (前期+4p)

A 89% (前期+4p)

A 88% (前期+3p)

「学びをつなぐ子ども」へのアプローチ
(学び続ける職員)

コミュニケーションを深めるための工夫[話し合う手順の表示・教材教具の活用・家庭学習のやり方指示等の実施]

「人と人との関わりを大切に子ども」へのアプローチ
(人と人との関わりを大切に職員)

誰もが知識・技能を理解したり他者の考えを受け入れたりするなどの納得をしていることを確認する。[自己評価の実施]

教師が話をする時間を短縮し、他者と話し合う必然性のある課題を設定(協働的な学習活動)した授業を行う[意図的・計画的実施]

【職員】

「自他を大切に子ども」へのアプローチ
(自他を大切に職員)

授業(特に話し合い活動)の中で他者を尊重する態度を身につけさせる指導の徹底[コミュニケーションの基本を守る]

肯定的評価をする[個々の性格に合わせた個別指導]

【感想・分析と今後の課題・展望】「めざす子ども像」については、“子どもの自己評価”“保護者による子ども評価”“地域・社会(評価委員)による子ども評価”と“「めざす子ども像」実現のための職員の自己評価”で実施し、オールAの評価であった。子どもの自己評価からは、“自己肯定感が低い”ことが判明した(前期肯定的意見:30%/質問項目「自分のことが好きですか」)ため、後期は一人一人を認める&発表の機会を増やすなどを意識したところ、その数値は57%まで回復した。しかしながらまだまだ低い数値である。次年度もコロナ対策を十分行ったうえで、体験活動や話し合い活動、発表機会の確保等を行っていく必要がある。また、子どもや保護者の評価項目の中にはB評価のものがいくつかあるが、それに対応する職員はA評価である。意識のずれがあると真摯に受け止め、引き続き、授業改善や人間関係づくりに努めていく。



令和2年度 島根県大田市立北三瓶小・中学校 学校評価 NO.3 【評価項目詳細】



めざす学校像	子ども						保護者(地元保護者、山留センター、農家)						評価委員						職員						
	小学校 低学年	小学校 中・高学年	中学校	評 価			評 価			評 価			評 価			評 価			評 価						
項目名	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	全評価	肯定%	各項目	
学校に来るのは楽しい			A		87%				A		92%				A		100%					A		87%	
子どもは、地域を元気づけていると思う			B		71%				A		100%				A		100%								
子どもは、地域のことを考えていると思う			A		90%				B		58%				A		100%								
子どもは、気持ちよく学校生活を送っていると思う			A		83%			A	89%		92%				A	100%	100%					A	83%		
子どもは、人の話を聞こうとしていると思う			A		87%				A		92%				A		100%								
子どもは、きちんと挨拶をしていると思う			A		87%				A		100%				A		100%								
子どもは、学んだことを使って新しいことに挑戦しようとしている			B		76%																	A	89%	A	92%
子どもは、協力し合って勉強していると思う			A		87%				A	81%		85%			A	100%						A	88%		
子どもは、協力を深めようとしている			A		83%				B	73%					A		100%								
子どもは、自分の長所・短所を理解していると思う			B		70%										B		62%								
子どもは、自分から進んで疑問に思ったことや興味のあることに対して調べようとしている			A		87%										B		69%								
子どもは、進んで家庭学習をしていると思う			B		74%				B	75%		62%			A		100%					A	88%		
子どもは、友だちを大切にしていると思う			A		83%																				
子どもは、自分のことが好きだ(大切にしている)と思う			B		57%																				

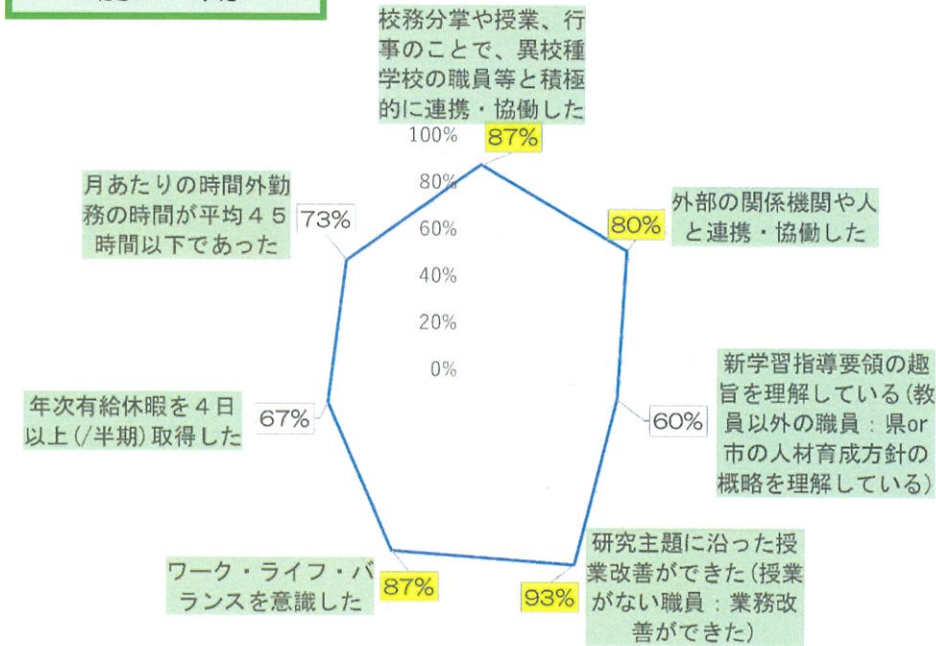
概 要	<p>○子どもの自己評価「自他を大切に子ども」像の項目：「自分のことが好き」が30%(前期C評価)から57%(後期B評価)と27ポイント上がった。○「学校に来るのが楽しい」と回答している子どもは、73%(前期)から87%(後期)と14ポイント上がった。○年間を通して、めざす学校像の肯定的割合は四者とも8割を超えている。</p> <p>▲保護者による「学びをつなぐ子ども」(-6ポイント/A→B)「自他を大切に子ども」(-8ポイント/A→B)の評価が下がった。▲評価がBのままである項目は、子どもの意識と大人の意識にずれがある。</p>
課題・分析と今後の取組	<p>伸びは見られたが、引き続き「自己肯定感が低い」ことは課題である。学習面においても人間関係においても、そしてコロナ禍においても、自己有用感を高められるよう教育活動の内容を見直す。またその場面や機会を確保し充実させる(授業改善及び総合的な学習の時間の見直し、子どもの学校経営参画等)。授業の評価においては、子どもと職員との意識にずれがある。不断の授業改善が必要である。</p>
	<p>学校関係者評価委員会から</p>
	<p>子どもの自己肯定感をあげるためには、家庭での関わり方も大切だと思うので、そういう研修をやることも必要である。</p>

自由意見については掲載しませんが、学校及び子どもたちでよりよくなるよう考えています。

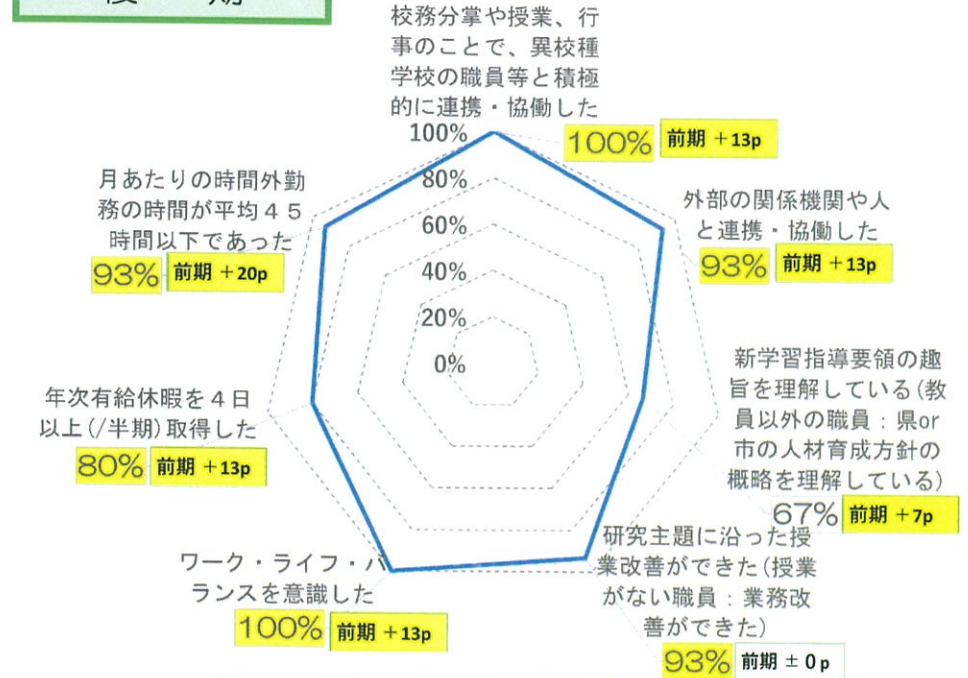


めざす職員像 ¹⁾	伸ばしたい力 ²⁾	期待する具体的姿 ³⁾
人と人との関わりを大切にする職員 ⁴⁾ <キーワード>「一緒に!」「あいがとう!」 ⁵⁾	社会力 ⁶⁾	職務を全うするために連携と協働を惜しまない職員(子どもの成長を支えるため また協働を進めるために 校種を超えて助け合う職員) ⁷⁾
学びをつなぐ職員 ⁸⁾ <キーワード>「あれ!?!」「やってみよう!」 ⁹⁾	教師力 ¹⁰⁾	プロフェッショナルとしての自覚を持った職員(次代に求められる資質・能力を理解して 子どもが楽しいと思える授業をつくる職員) ¹¹⁾
自他を大切にする職員 ¹²⁾ <キーワード>「ありのままに!」「なんとかなる!」 ¹³⁾	人間力 ¹⁴⁾	ワーク・ライフ・バランスを考えプライベートな時間も大切にする職員(人間力を高めることが教師力を高めることにつながることを理解し それを実践する職員) ¹⁵⁾

前 期



後 期



90% A 前期 +12p B → A

【感想・分析と今後の課題・展望】多くの項目が前期を上回るポイントであった。しかしながら、「新学習指導要領の趣旨を理解している(教員以外の職員：県or市の人材育成方針の概略を理解している)」の伸びがあまりなくB評価に留まった。研究授業・公開授業を比較的多く行ったにもかかわらず、伸びが見られなかった要因としては、情報提供・共有等が十分でなかったこと、全員で協議する機会が少なかったこと、人材育成方針資料を配付するにとどまったこと等が考えられる。小学校は今年度から、中学校は次年度から新学習指導要領が完全実施となる。コロナ禍において十分な研修が行われなかったと謙虚に反省し、次年度も授業改善を中心に小・中学校共通の研究主題のもと取り組んでいく。働き方改革の面ではよい結果となっているが、学校再編及びそれに伴う組織の再編等過渡期であり、次年度以降の大きな流れによっては、これまで以上の小・中連携及び分掌・分担の再考が必要である。